

BMW Studio ONE

BMW EfficientDynamicsの理念をより分かりやすく伝える場として、大型温室「BMW Studio ONE(ビーエムダブリュー・ステュディオ・ワン)」が、東京・神宮前にオーブン

スタジオ名内の”ONE”には、BMWがプレミアムセグメントにおいてナンバーワンであるという意味が込められています。それは、日本における販売台数がプレミアムセグメントでトップであることもさることながら、ダウ・ジョーンズのサステイナビリティ・インデックス自動車部門において5年連続でトップに選定されるなどBMWグループの環境への取り組みが高い評価を得ていることを示しています。

今回、BMWのこのような活動を広く訴求するため、将来性のある持続可能なライフスタイルを考えるためのステュディオを開設いたします。

将来性のある持続可能な生活を提案するこの空間は、約200平方メートルの温室内で展開されます。自然樹形の観葉植物を植えて、雑木林のように仕立てた庭のある温室(デザイン監修:温室 塚田有一×グリーン・ワイズ)では、BMW EfficientDynamicsの思想に基づく一連のテクノロジーを採用した新型車両、BMWグランツーリスモの展示をはじめ、週末限定の有機野菜のマルシェとそこで販売される野菜をふんだんに使ったオリジナルメニューを提供するカフェ＆ラウンジ、オリジナルのBMW BE@RBRICKの販売など、もりだくさんの内容で構成されます。そしてイベントのメインとなるのが建築、料理、映画、音楽、農業、アロマセラピー、写真、選書などさまざまな分野で活躍する8名のクリエイターによるトークショウと「サステイナブル・ライフ・ラゲッジ」の展示です。

「サステイナブル・ライフ・ラゲッジ」とは、8名のクリエイターが考える「将来性のある生活のあり方」を、それぞれがすすめるサステイナブルなアイテムを展示することでメッセージを具現する企画です。またブックディレクターの幅允孝氏が各クリエイターの考えをもとにセレクトした本も同時に展示。新たな生活価値基準を求める人々のクリエイティブかつ知的好奇心を刺激し、想像力を喚起します。

次世代へと受け継がれる新たな価値観を創造し、明日への期待を予感する。ニューBMWグランツーリスモの持つ世界観を空間全体で表現した、今までになく新しい体感型プロジェクトです。



BMW Studio ONE

「サステイナブル・ライフ・ラゲッジ」は、
将来性のある価値観を具現化します。

燃料消費効率の向上と排出ガスの低減を実現しながら、同時に比類なきパフォーマンスをもたらすBMW EfficientDynamics——大きな視野で未来への持続性を考えるために重要なBMWの理念です。大型温室「BMW Studio ONE」のメインイベント「サステイナブル・ライフ・ラゲッジ」は、その理念に基づき、8人のクリエイターのみなさんが考える「持続的で将来性のある生活のあり方」を、それぞれがすすめるサステイナブルなアイテムを展示することでメッセージを具現する企画です。

展示スペースに置かれるのは、クリエイターがプライベートで愛用している貴重な品々です。環境問題という枠組みだけにおさまらない独自の視点で選んだサステイナブルなアイテムは、先祖代々受け継がれてきたもの、日々の生活に欠かせないもの、意外性のあるユニークなものなど……。クリエイターのみなさんの人となりを垣間見れるまたとない機会です。

またブックディレクターの幅允孝氏が各クリエイターのみなさんの考え方をもとにセレクトした本も同時に展示。新たな生活価値基準を求める人々のクリエイティブかつ知的好奇心を刺激し、想像力を喚起します。



BMW Studio ONE

「BMW Studio ONE」では、
「サステイナビリティ」をテーマにトークショウを4回開催します

大型温室「BMW Studio ONE」のメインとなるトークショウのテーマは「サステイナビリティ」(Sustainability=持続可能性や永続可能性)です。各界のオピニオンリーダーのみなさんに、未来を見据えた「サステイナブルな暮らしのあり方」について語っていただきます。さまざまなジャンルで活躍する8名が考える、環境問題という枠組みにおさまりきらない独自の「サステイナビリティ」とはなにか?テーマは、ライフ、環境、自然、カルチャーの4つです。スピーカーのラインナップもさることながら、そのユニークな組み合わせからどんな化学反応が生まれるのか?「BMW Studio ONE」の名にふさわしい、これから時代を牽引する将来性のある持続可能なライフスタイルの提言が期待できます。

場 所 | BMW Studio ONE(東京都渋谷区神宮前4-9-6)

日 程 | 2010年1月29日、2月5日、12日、19日(毎週金曜日)

時 間 | 19:30~21:30(トークショウ: 20:00~21:00)

トークショウ終了後には登壇者を交えたコミュニケーションサロンを予定。

招待客 | 各回25組50名(抽選)

応募方法 | www.bmw.co.jp/specialよりお申込み下さい。当選者へはイベントの1週間前までにご連絡いたします。

2010年1月29日(金)

テーマ | ライフ 「住む」と「食べる」から提案するサステイナブルな生活

出演者 | 坂 茂(建築家) × 野村 友里(フードディレクター)

応募締切 | 1月20日(水)



2010年2月5日(金)

テーマ | 環境 「音」と「映像」の秩序と調和の世界

出演者 | 龍村 仁(映画監督) × 井出 祐昭(サウンド・スペース・コンポーザー)

応募締切 | 1月27日(水)



2010年2月12日(金)

テーマ | 自然 農家とアロマセラピストの考える自然と共存する生き方

出演者 | 秋山 豊寛(宇宙飛行士、ジャーナリスト、農家)

× 大橋 マキ(アロマセラピスト、アロマ空間デザイナー)

応募締切 | 2月3日(水)



2010年2月19日(金)

テーマ | カルチャー 写真と本からひも解く新しいライフスタイル

出演者 | 今森 光彦(写真家) × 幅 允孝(ブックディレクター)

応募締切 | 2月10日(水)



BMW Studio ONE

心地の良い温室カフェ・ラウンジでサステイナブルなマルシェビュッフェを味わう

大型温室「BMW Studio ONE」には、植物にかこまれた心地のよいカフェ・ラウンジが併設されます。カフェ・ラウンジのメニュー監修は、表参道の「Lotus」「Montoak」等の数々の店舗や、N.Y.の高級食材店「Dean & Deluca」丸の内、渋谷の総合プロデュース、新丸ビル7階「marunouchi house」等を手掛けた、山本宇一氏。

「サステイナブルな生活」にかけない、新鮮な野菜を中心としたビュッフェを提供します。お料理に使われるのは、イベント期間中に毎週末開催されるマルシェでも販売される、生産者の顔が見える安心の食材です。ドリンクメニューの一部として、ネスレが提供するセルフサービスのコーヒー9種類をすべて100円で販売。ラウンジタイムは、シャンパンやビオワインもご用意し、ビュッフェとともに各種オードブル類も含め様々なメニューをお楽しみいただけます。

◆ランチタイム

フード:マルシェ・ビュッフェ(スープ、ブレッド、etc) ￥1,500 (予価)
ドリンク:カフェバリエーション(コーヒー、ティー、ソフトドリンク 各数種)

◆ティータイム

フード:デザート
ドリンク:カフェバリエーション(コーヒー、ティー、ソフトドリンク 各数種)

◆ラウンジタイム

フード:マルシェ・ビュッフェ(スープ、ブレッド、etc) ￥2,000 (予価)、スナック、デザート
ドリンク:カフェバリエーション(コーヒー、ティー、ソフトドリンク 各数種)、シャンパン、ビオワイン

営業時間 | 11:00～23:00

席 数 | 26席

マルシェ・ビュッフェ イメージ



ベジタブルスープ イメージ



BMW Studio ONE

廃プラスティック製のBMW BE@RBRICKがデビューします

「BMW Studio ONE」の開設を記念して、ビー・エム・ダブリュー株式会社は、株式会社メディコム・トイ(玩具企画製造販売、本社:東京、代表取締役社長:赤司竜彦)とのコラボレーションで、同社のオリジナル・フィギュア、BMW BE@RBRICK(3サイズ)を制作しました。

ニューBMWグランツーリスモが展示される、大型温室「BMW Studio ONE」(場所:東京都渋谷区神宮前4-9-6、開催期間:2010年1月30日から2月28日まで)で発表、一部発売します。販売収益の一部は、環境と貧困問題についての情報提供と啓発活動をおこなっている、NGO団体「グローバル・ヴィレッジ」*(事務局:東京、代表:ソフィア・ミニー)へ寄付します。

BMW BE@RBRICKは、BE@RBRICKとしては初の廃プラスティック製で、BMW EfficientDynamicsをイメージした青空の模様。いずれも、燃料消費効率の向上と排出ガスの低減を実現しながら、同時に比類なきパフォーマンスをもたらすBMW EfficientDynamicsというBMWの新たな理念に基づくスタイルです。また、胸にはBMWのエンブレムをプリントしています。



BMW BE@RBRICK 50%

体長:約35ミリ、ストラップつき、
限定数:3000個
価格:500円
廃プラスティック製。売上的一部分をNGO団体
「グローバル・ヴィレッジ」へ寄付します。



BMW BE@RBRICK 100%

体長:約70ミリ
限定数:1500個
価格:1300円、廃プラスティック製。
売上的一部分をNGO団体「グローバル・ヴィレッジ」
へ寄付します。



BMW BE@RBRICK 400%

体長:280ミリ
廃プラスティック製。
大型温室「BMW Studio ONE」の開設期間中、
会場でアンケートにお答いただいたお客様の
なかから、抽選で50名にプレゼントします。

BE@RBRICK TM&© 2001-2010 MEDICOM TOY CORPORATION. All rights reserved.

* NGO団体 グローバル・ヴィレッジ: www.globalvillage.or.jp

グローバル・ヴィレッジは、環境保護と国際協力に取り組むNGOです。環境問題と貧困問題についての情報提供やイベント、キャンペーンを通じて問題を提起し、行動を呼びかけています。また、フェアトレード商品を専門に扱うブランド「ピープル・ツリー」を展開する法人を設立し、フェアトレードの普及・促進を行っています。
代表:ソフィア・ミニー 2009年、英国より大英帝国勲章第5位を受章

BMW Studio ONE

注目のマルシェが「BMW Studio ONE」の屋外エリアに登場。

マルシェで販売される野菜は、温室カフェ・ラウンジのメインメニューとなるベジタブル・ビュッフェと連動。たとえば、——瀬戸内海の気候を生かしたコスモファーム 中村敏樹さんの色とりどりのイタリア野菜——中村さんは、野菜の匠として、長年にわたり、全国の生産者においしい野菜の生産指導をしているほか、野菜のソムリエ「日本ベジタブル＆フルーツマイスター協会」講師もつとめています。また、都内の有名レストランなどに『旬にこだわったおいしい野菜』を届けています。——そのほか、日本各地のみずみずしい採れたて野菜がならびます。目で見て、香りをかいでの会話を、マルシェのお買物で、将来性のある持続可能なライフをゆたかにしましょう。

開催日程 | 2010年1月30日(土)、2月6日(土)、2月13日(土)、2月20日(土) 2月27日(土)計5回

開催時間 | 10:00～16:00まで

天候などにより中止や時間が変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

Produced by 株野菜ビジネス やさい Labo



坂 茂 建築家

ばん・しげる

1957年東京生まれ。クーパー・ユニオン建築学部を卒業。82年、磯崎新アトリエに勤務。85年に坂茂建築設計を設立。95年から国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)コンサルタント、同時にNGO団体「VAN」設立。主な作品に「カーテンウォールの家」「ハノーバー国際博覧会日本館」「ニコラス・G・ハイエック・センター」などがある。また、現在建設中であるフランス メス市に新ポンピドゥー・センターが2010年に完成予定。これまでに、フランス建築アカデミー ゴールドメダル(2004年)、アーノルド・W・ブルナー記念賞建築部門世界建築賞、トーマス・ジェファーソン 建築賞(ともに2005年)、ロルドル・ナショナル・ド・ラ・レジオン・ドヌール勲章(2009年)、数々の賞を受賞。2001年から2008年まで慶應義塾大学環境情報学部教授。2009年よりハーバード大学GSD客員教授。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

サステイナブルという言葉はファッショニッショーンになっているので正確には意味はわかりませんが、学生を自然災害の被災地に連れて行って、ボランティア活動をしています。そういう場でも建築家が力を発揮できることがあると学生に教えるのが目的です。次世代を育てるというのは、大義で、持続可能な世の中にしていくことに当たるのではないかと思います。

■それはどんなこと(とき)ですか？

上記の活動がサステイナブルであるなんて考えたことありません。また、被災地で学生には、“誰かのためにやってあげている”という意識を決して持たないように教えています。“自分のためにやっている”と。人のためにやっているという意識を持つと、活動が不純になりますからね。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

最近の出来事となると、特にありません。教育活動をするきっかけとなったのは、自分がアメリカの大学でよい先生による教育を受けたからです。でも、その先生に恩返しもできないし、向こうも期待していない。唯一できることが、自分なりに重要だと思うことを次世代に伝えること。それが私の責任だと思ってやっています。

野村 友里 フードディレクター

のむら・ゆり

おもてなし上手の母のおかげで来客の絶えない家庭に育ち、食の道を志す。1997年に料理を学びに渡英。現在はフードクリエイティブチーム「eatrip」を主宰。ケータリングフードの個性的な演出や、料理教室、アートとして食をとらえた雑誌やラジオ、テレビでの連載など、食の可能性を多岐にわたって表現し、その愉しさを世に伝え続けている。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

改まって”これはサステイナブルだ”、という考え方を意識するというよりも、強いて言えば好きか嫌いかという選択の延長上にあるものだと思います。好きならずっと使い続けますし、大事だから人と分かち合ったりもする。失いたくない、大事にしたいと思えば必然的に壊さないようになると思うので、それが結果としてサステイナブルに通じていくのではないかと思います。

■それはどんなこと(とき)ですか？

ものというよりは、目に見えないことの方がそう感じることは多いですね。人間関係だったり、人の営みだったり、環境などでしょうか。なんだかんだ日本は平和で自由だと思います。考えて実行できる、選択ができる、表現もできる。そういう状況が一変し、何もできないことってとても不幸せだと思うので、現在のような状況がずっと続いてほしいと思っています。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

この出来事という、点では考えていません。ただ最近、改めて子供が誕生することは奇跡の様なことだな、と思っています。それが人間の歴史と共に連綿と続いている。すごく神秘的で原始的なことですよね。私は常に今を大事にしたいと思っています。一生懸命生きれば、そうやって続していくものにも、何か影響が及ぶのではないかでしょうか。

龍村 仁 映画監督

たつむら・じん

1940年兵庫県宝塚市生まれ。63年、京都大学文学部美学科卒業後、NHK入局。74年ATG映画『キヤロル』を制作・監督したを契機にNHKを退社。76年『シルクロード幻視行』でギャラクシー賞、87年『セゾングループ3分CM』でACC優秀賞受賞。同年、サイエンス・ファンタジー『宇宙船とカヌー』で、また92年にはNTT DATAスペシャル『宇宙からの贈りもの・ボイジャー航海者たち』でギャラクシー選奨受賞。89年から制作を開始したライフ・ワーク『地球交響曲第一番』を92年に、『地球交響曲第二番』を95年に公開、翌年、京都府文化功労賞を受賞。97年に『地球交響曲第三番』を公開。2000年、有限会社龍村仁事務所を設立。2001年に『地球交響曲第四番』、2004年に『地球交響曲第五番』、2007年には『地球交響曲第六番』を公開。2010年には最新作『地球交響曲第七番』が完成予定。著書に『地球(ガイア)のささやき』(創元社、角川書店)『地球交響曲(ガイアシンフォニー)第三番 魂の旅』(角川書店)『地球(ガイア)の祈り』(龍村ゆかり共著、角川学芸出版)など。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

サステイナビリティは、古くから環境のキーワード。最近は一般的にも浸透してイロイロなことが提言されている。でも、自分としては、地球システムの一部として生かされている事実を体感することが鍵だと考えています。それはアタマで意識することではなく、カラダでわかる事。そこで重要なのは心の問題です。

■それはどんなこと(とき)ですか？

花を見てキレイだと思うことも自然と繋がっている証拠。また、人工的なビル群も人間の営みのひとつ。ふたつの感覚があることは人間の特性で、問題はバランスです。現代社会は生かされている体感を忘れがちですが、思い出す回路を作ればいいだけです。ただ忘れているだけなので、知識ではなく、何かに感動することで回路は開くんです。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

“腹八分目”とは昔の人はよく言ったもんだと思いますよ。それは食事だけでなく、すべてのことに当てはまる。映画製作は非常にお金がかかりますが、今は予算の8割まで揃つたら何とか完成できると思っています。最初は借金ですが、公開後にどうにか2割が戻ってくる。何事も腹八分目にしておけば、うまく物事が循環することに気づきました(笑)

井出 祐昭 サウンド・スペース・コンポーザー

いで・ひろあき

ヤマハ株式会社チーフプロデューサーを経て、2001年有限会社エル・プロデュースを設立。音に関する最先端技術を駆使し、音楽制作、音響デザイン、音場創生を総合的にプロデュースすることにより様々なエネルギー空間を創り出す『サウンド・スペース・コンポーズ』の新分野を確立している。主な音響作品として、新宿・渋谷駅の発車ベルシステム、NHKスペシャル『月山』、東京銀座資生堂ビル、PACIFIC FLORA 2004 シンボルガーデン、愛知万博瀬戸愛知県館、MEGASTAR プラネタリウム、表参道ヒルズなど。また、音楽療法の分野として、アメリカ最大の癌センターのひとつで、世界最先端の治療技術を持つThe University of Texas M.D. Anderson Cancer Center にてClinical Studyを行った。立体音響や発音方式等で特許を取得している。著書に、「見えないデザイン～サウンド・スペース・コンポーザーの仕事」(ヤマハミュージックメディア)(<http://elproduce.com>)



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

“エコ”がテーマに掲げられた2005年の愛・地球博にて、瀬戸愛知県館の音楽、音響プロデュースをやらせて頂きました。そのとき、何をどう表現するべきかで非常に悩みました。辿り着いたのは、サステイナブルな音や空間の体験。子どもたちの心の中に「生きてる」感覚が生き続けて、将来この問題を考える時湧き上がってくるようなものにしたかったのです。

■それはどんなこと(とき)ですか？

元開催場所でもあった海上の森で、1年に渡って300本近い木の音、昆虫の音、伏流水の音などを録音しました。木の中の音は水分などを吸い上げる音ですが、力強いゴーッという音やボコッボコッという音が呼吸や波のように大きな周期で流れています。もしこのような音がふつうに聴こえていたら、「生命」についての認識が変わるものではないかと思い、蟻の歩く音など森羅万象の音も含め、足元など会場のいたるところから音が出るような音響システムで、体感的に「生きてる」を表現しました。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

万博以降でも、表参道ヒルズなど様々な空間で生命感や色彩感を感じるような自然の音を流すことがあるのですが、空間が瑞々しく生き生きとして来て、問い合わせも非常に多くなります。音楽の立場からは、「どう行動するか？」の前に「どう感じるか？」が大事で、この点、特に日本人は自然を感じ表現する才能に優れていると思います。万葉集などの感性、間の感覚、空気を読める力などで特に感じます。この課題について、感性面からも日本が世界をリードしていく時代に入ったと思うことがあります。

秋山 豊寛 宇宙飛行士、ジャーナリスト、農家

あきやま・とひろ

1942年東京生まれ。ICU国際基督教大学卒業。1966年東京放送入社。ロンドン駐在、外信部、政治記者を経てワシントン支局長。1990年12月2日から9日間、日本人初の宇宙飛行士としてソ連の宇宙船ソユーズ、宇宙ステーション・ミールに搭乗し、地球の映像を撮影、中継した。1992年には熱気球で世界初のベーリング海峡を横断。国際ニュースセンター長などを経て、1995年12月に東京放送を退社。翌年から福島県滝根町で有機農業に従事。1年のうち8か月は農作業、椎茸栽培にかかる。1990年ソ連人民友好章、1991年東京都民文化栄誉章、2000年宇宙生物科学会功績賞を受賞。著書に『鉛と宇宙船』(ランダムハウス講談社)『宇宙よ(上・下)』(共著・文芸春秋社)『農をめぐる旅』(富民協会)『農人日記』(新潮社)『宇宙と大地』(岩波書店)など。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

サステイナブルという言葉を使う時は、まず「何にとって」という事を考えなければならぬと思います。ここでは、「人間だけではなく、生きとし生けるもの」にとってのサステイナビリティという文脈で捉えたいと思います。ですから、今の僕の生活、つまり「農のある暮らし」はサステイナブルを意識していることが前提なのです。

■それはどんなこと(とき)ですか？

暮らしが続いているという手応えとしては、自分でつくった作物を収穫をしている時ですね。食べる事はとても大事なのです。きちんとしたものを食べなければ、身体も精神も正常に機能しなくなってしまう。今の時代は、自然としての人間も大切にしていない気がします。ちゃんとしたものを食べてしっかり眠る。それが壊れると社会全体も影響をうけます。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

何かが崩れている、壊れはじめていると感じた時には逆にサステイナビリティについて考えてしまいます。今年の夏、それまで毎年やって来たノスリや、ふくろう、アオバズクが姿を見せず、声を聞かせてくれませんでした。彼らが存在した事がサステイナビリティ。居なくなったのは、3キロほど先の山の尾根に風力発電の風車が建設され、自然林が切りはらわれたためでしょう。エコという旗をかかげた「自然破壊」ですね。

大橋 マキ アロマセラピスト、 アロマ空間デザイナー

おはし・まき

1976年神奈川県生まれ。フジテレビアナウンサーを退職後、イギリスに留学。植物療法を学び、IFA認定アロマセラピスト資格を取得。帰国後、アロマセラピストとして病院で活動するほか、執筆、翻訳、テレビやラジオ番組のナビゲーターなど、活動の場を広げている。'08年1月に第一子となる長女を出産。著書に『アロマの惑星』(木楽舎)『セラピストという生き方』(BABジャパン)『日々香日』(サンマーク出版)など。オリジナルブレンドアロマオイル「aromamora」(<http://www.aromamora.jp/>)のプロデュースも手がける。株式会社アットアロマ認定空間デザイナーとして、イベントやショップでの香りによる空間演出も行う。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

私はアロマセラピストとして活動をしていますが、アロマはひとつのきっかけで、いろんな世界を見る覗き窓なんです。アロマを通じていろんな人と知り合ったし、環境問題も考えるようになった。それを私自身だけで知っているのはもったいない。身近に入りやすい方法で、アロマによって世界がつながればいいな、と思っています。

■それはどんなこと(とき)ですか？

例えば「aromamora」のアロマオイルの瓶の上のかぼちゃ。これは工業製品の型を作る素材で、粉になって固まらないかった部分をもう一度固めて再利用しているものなんです。また、メッセージカードは象のフンの繊維で作ったペーパー。プロダクトを作る時にもリユースやサステイナブルというのは、常に意識しています。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

最近、引っ越したのですが、家の目の前が山。庭と山がつながっていて、山芋もあるし、ローリエも自生している。薪となる木も拾ってこられる。自然の中で暮らすことができたのがすごくうれしいです。人間として基本的なことを娘と一緒に学んでいるような感じで、それがアロマにもいい影響を与えられたらしいなと思っています。

今森 光彦 写真家

いまもり・みつひこ

1954年滋賀県生まれ。琵琶湖をのぞむ田園風景の中にアトリエをかまえ活動をしている。自然と人とのかかわりを「里山」という空間概念で追い続ける。著書に『里山物語』(新潮社)『湖辺』(世界文化社)『世界昆虫記』(福音館書店)『里山を歩こう』(岩波書店)など多くの写真集がある。1995年、第20回木村伊兵衛写真賞を『世界昆虫記』『里山物語』で受賞し、2008年には『昆虫 4億年の旅』(東京都写真美術館、新潮社より同名写真集)で第28回土門拳賞を獲得するなど数多くの賞を受賞。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

以前からあたり前のように実行していることなので、特に意識はしていないですね。家の前にある畑では、雑木林の落ち葉を肥料にしていますし、仕事場のストーブは20年以上薪を使っています。田んぼや雑木林、小川など、人と生き物たちが共存する里山の生活は、循環システムそのもの。ここ最近の問題は、人間の不管理です。

■それはどんなこと(とき)ですか？

自然環境は人間が手を加えず、何もしないほうがいいというのは誤解なんです。原生林でない限り、人間が手を入れないと生物の多様性はなくなってしまいます。しかも、本当の意味での原生林を日本で見たことがない。雑木林の落ち葉を肥料に稻作をし、薪で暖をとる。日本古来の農業環境は非常にサステイナブルですし、人間も循環の一部です。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

特にはないですね。でも、私が田舎暮らしからということではないと思いますよ(笑)滋賀県大津市は京都まで2駅の町屋ですし。サステイナブルな生活は田舎も都会も関係のないこと。どこに住んでいても使い捨ての生活はできますから。逆に、田舎にいたほうが感じ取れることもありますし、実際それが日本の現状かも知れません。

幅 允孝 ブックディレクター

はば・よしたか

1976年愛知県生まれ。BACH(バッハ)代表。慶應義塾大学法学部を卒業し、青山ブックセンターに入社。六本木店にて建築・デザイン関連書籍のバイイングを担当。その後、編集者石川次郎氏と出会い株式会社ジェイ・アイに入社。2005年に独立。人と本がもうすこし上手く会えるよう、さまざまな場所で本の提案をしている。六本木ヒルズ「TSUTAYA TOKYO ROPPONGI」や、国立新美術館「スペニアフロムトーキョー」などのショップにおける選書や、千里リハビリテーション病院、スルガ銀行ミッドタウン支店「d-labo」のライブラリ制作など、その活動範囲は本の居場所とともに多岐にわたる。



■お仕事あるいは生活の上で、「サステイナブル(持続可能)」であることを意識されたことはありますか？

本は、それこそパピルスの時代からあるわけで、すでに長持ちすることが実証されているものですね。海外では本当に大切に扱われていて、前世紀のものや今世紀初頭の書物も状態がいいまま残っている。連綿と流れていくつながり＝サステイナブルと考えると、自分がやっている本の仕事にも当てはまる部分があると思います。

■それはどんなこと(とき)ですか？

海外で買い付けた古本を整理していると、たまに手紙が入っていることがあるんです。80年前の本に挟まった、60年前に書かれたラブレターとか。書いた人は21世紀に日本人に読まれるとは思わなかっただろうなあと(笑)それが自分の手元から、また知らない人に渡っていくわけで。それもサステイナブルなことだと思いますね。

■最近「サステイナブル(持続可能)」だと感じた印象的な出来事はありましたか？

子どもができたことは大きいですね。自分のDNAが入っているかは可視できませんが、頭を搔く仕草や、汗の匂いが似ていたり。自分もかぶっている帽子を嗅ぐとオトンの匂いがしたりするし(笑)また、今まで自分が死ぬまでは天変地異が起きて欲しくないと願っていましたが、最近は子どもが死ぬまではって思うようになりました。